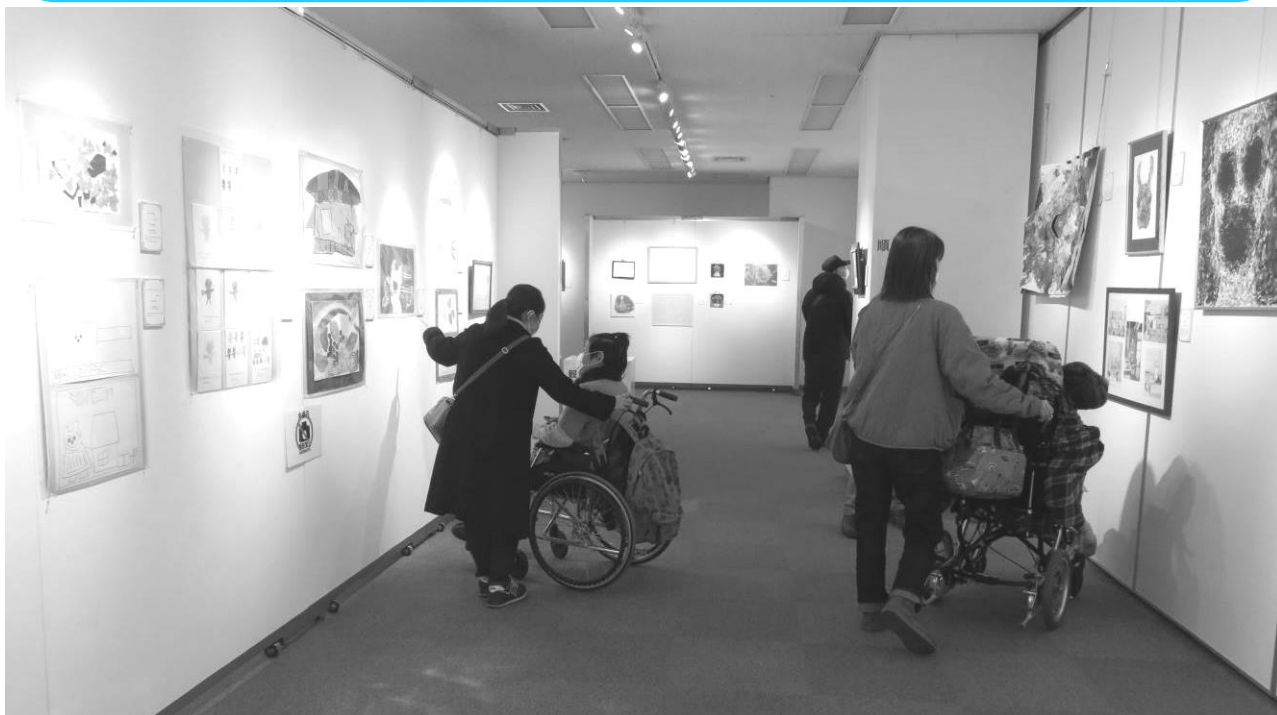


KSK 川崎市障害者社会参加 推進センター通信

編集人 川崎市障害者社会参加推進センター
所長 中込 義昌
編集責任者 広報・啓発委員会
委員長 伊藤 實
〒210-0834 川崎市大島 1-8-6
川崎市南部身体障害者福祉会館内
電話 044-246-6941
FAX 044-246-6943
E-mail zksk@nifty.com
<http://kawashinkyo.org>

令和 3 年度障害者作品展 開催



令和 3 年度川崎市障害者作品展がアートガーデンかわさき第 1 展示室にて、令和 3 年 12 月 15 日(水)から 19 日(日)の 5 日間にわたり開催されました。

今年度の出展作品数は絵画 47 点・写真 5 点・書 15 点・文芸 1 点・手工芸 12 点の計 80 点が出展され、緻密に描き込まれた作品や力強さが伝わってくる作品、思わず笑顔になってしまう作品等、様々な分野の個性あふれるたくさんの素晴らしい作品が出展されました。

また来場者数についても前回から 100 名近く増え、展示期間中に延べ 350 名もの方々が観覧に訪れてくださいました。

前回、コロナの影響でやむを得ず中止せざるを得なかったワークショップ(創作体験)

についまでも今回は実施することができ、12 月 18 日(土)には川崎市中部身体障害者福祉会館 作業室によるアイロンビーズ作り体験、12 月 19 日(日)には(公財)神奈川県社会復帰援護会による 3 色パステルアート体験と、どちらのワークショップでも、参加された方々が楽しみながら作品を作っていく様子が見られました。

観覧者アンケート調査にも、ワークショップに毎年楽しく参加しているのでこれからも続けてほしいとの声をいただくことができました。

コロナ渦で厳しい状況の中でしたが、作品

展実行委員会で感染対策等に細心の配慮を払ったことや、来場の皆様や出展者の皆様がそれぞれの立場で感染拡大防止対策にご協力いただけたお陰で無事に開催することができました。改めて心から感謝を申し上げます。

次回も感染対策等に配慮し、安心して楽しんでいただける障害者作品展にできるよう、皆様の出展を心よりお待ちしております。

ワークショップの様子



（アイロンビーズ作り体験）



（3色パステルアート体験）

『障害者作品展』に寄せて

新型コロナウイルス感染第5波が終息しかけていた昨年11月、新聞の広告欄に「歌があるから、のりこえられる」との見出しで〈You Will Be Found〉の楽譜と歌詞の抜粋が掲載されていた。〈Let that lonely feeling wash away. (孤独な気持ちは 捨て去ろう)〉との歌詞に、新型コロナウイルス感染第5波が終息しかけている頃だったので惹かれるものを感じました。パンデミック、クラスター、ソーシャルディスタンス、アウトブレイク、テレワーク等々とやたらにカタカナ横文字が氾濫する暗い闇のような空間からやっと抜け出せると感じていたからかもしれません。

しかし、それは一瞬の幻影でしかありませ

んでした。年が明けるとオミクロン変異株による感染が急拡大。第6波の感染者の約70%が60歳以上の高齢者であり、しかも介護を必要とする入院患者の比率が高まり、患者一人当たり拘束される時間が長く、その為看護師の負担が増して手が足りなくなる問題が重なり、空きベッドがあっても新たな患者の受け入れが困難になっていると報告されています。この状況は、日頃何らかの介助を必要とする障害者にとって、万が一自分が感染し入院が必要になったときはどうなるのか、不安を感じている問題でもあります。最近是不自然な生活を強いられ続けているせいか、エンドレスになってしまうのではないかという絶望感を覚えます。

昨年の春、感染予防のため自粛生活で人通りの少ない満開の桜並木で写生をしていた時です。小鳥達がのんびりと枝の間を飛び回り、桜の花を啄み、蜜を吸っているのを目撃しました。この情景をモチーフにして、東北地方の冠雪を残す山並みを背景に当てはめた絵を描いてみました。コロナ禍が一日でも早く終息して平常な日々が戻ることを願い、令和3年度川崎市障害者作品展に出展しました。



（古川雅彦氏 出展作品）

私が川崎市障害者作品展に出展するようになって3年目になります。この展覧会にはいろいろな障害を抱えた方々が出展されていますが、毎回感心するのはどの作品も個性豊かで、その表現方法もさまざまです。絵画・写真・書・手工芸など一つ一つの作品は創作者の生き生きとした喜びが溢れており、その

作品を目にすると動けなくなる様な感動を毎回もらっています。

最近、私は聴覚障害者ゆえに閉塞した日常生活で孤独な気分になりがちでしたが、

〈So let the sun come streaming in Cause you'll reach up and you'll rise again (陽の光を受けよう 手を伸ばせば また立てる)〉の歌詞に背を押され、これからも出展することで、皆さんと共に元気と喜びを分かち合えたらと思っています。

最後に、運営してくださいました実行委員スタッフの皆様に、心より感謝申し上げます。

(出展者 ふるかわ まさひこ 古川 雅彦)

展示アドバイザーとしての空間づくり

毎年 12 月に、アートガーデンかわさき第 1 展示室で開催される川崎市障害者作品展。川崎市障害者社会参加推進センターと川崎市、(公財)川崎市文化財団が協力し開催している本展に、前回にひきつづき、展示アドバイザーというかたちで関わらせていただきました。

今回はコロナ禍にもかかわらず、絵画・写真・書・文芸・手工芸の各分野から計 63 点の作品が出展され、観覧者は 256 名と大変盛況であったとのこと。非常に充実した作品展であったと記憶しております。今回もコロナ禍での開催となりましたが、集まった作品は前回にも増して力作ぞろい。作品数も過去最多であったと聞いております。展示作業をしながらも、思わず見入ってしまう、素晴らしい作品ばかりでした。

展示作業に際しましては、多岐にわたる分野の作品が展示される作品展ですので、作品の個性を活かし、ひとつひとつの作品をできるだけゆっくり鑑賞できるような空間づくりを大切にしております。また、作品によって異なる展示の方法や配置、目線の高さなどに常に留意して、車いすご利用の場合やお子様

などにも、楽しくご観覧いただけるように心がけております。

展示作業を終えて、今年度の出展作品が展示された空間を眺めていた時、それぞれの作品が唯一無二のクリエイティビティを有していると同時に、感性のみずみずしさと豊かさがひしひしと伝わってきて、作品を制作することの奥深さを、あらためて感じることができました。



(目線の高さや間隔に留意し展示を行いました)



(照明の角度等も何度も調整されています)

本展が、豊かな才能に発表の場を提供し、作家の励みになると同時に作品が蓄積されていくことは大変意義深いことであり、ぜひ継続的に発表を続けていただければと思います。

また、作品展実行委員会の皆さまや川崎市障害者社会参加推進センター職員の方々の展覧会開催への情熱と、厳重な感染症対策、展示作品に真摯に向き合う姿にも非常に大きな感銘を受けました。

今後も毎年の展覧会を通して、皆様の作品との出会いを心から楽しみにしております。

(川崎浮世絵ギャラリー学芸員 ひるた ゆきこ 蛭田 裕紀子)

ことばの意味

2 年前から始まった新型コロナウイルスによる感染状況がなかなか収まらない中、これまでは何事もなくてできていたことが、コロナによってできなくなったというニュアンスで使用されている「コロナ禍」という言葉は、「新型コロナウイルス感染拡大の影響で…」を短く表現するために使うのが本意のようです。「災」は、人間が防ぐことの出来ないまさに運命による災害を指し、「禍」は人間の営みによって起こされる“わざわい”までを含めて指しています。

ワクチン接種の順位で「高齢者」に次いで「基礎疾患を有するもの(13 項目の病気や状態の方で、通院／入院している方)」と示され、その 13 項目の中に重度心身障害が含まれていたため、精神障害、知的障害に関わる方々からの働きかけで、それぞれの障害が「疾患」として 14 つ目の項目に追加されましたが、あくまでも障害者ではなく疾患を有するものとして扱われています。

障害福祉施策の構築にあたって、障害による日常生活の大変さを表現するため、障害の程度を重度・重症化・重複を組み合わせることで表現しています。それぞれの定義を紹介したいと思います。障害が「重度」とは、命と日常生活を保つための支援（援助）が継続的に濃厚に必要な状態、「重症」とは日常生活に医療的ケアが必要不可欠な状態にあることです。医療によるケアの必要性は少ないけれど、毎日の生活を支える 24 時間の人的資源や多くの配慮が必要な人は、重症ではなく重度となります。重複障害とは、医学用語から派生したものである「障害」を 2 つ以上併せ有することと言い、厚生行政と文科行政(学校教育法)では併せ有する障害に違いがあります。

近年、継続的に濃厚な介護を必要としながら、医療的なケアも常に行っていかなければ生活が保てなくなるような障害の重い人が増

えています。その背景には、医療の進歩があります。また、障害の重度・重症化が進む一方で、どんなに重い障害のある人も社会の中で一人の人間として生きていける社会を作り出す動きがあります。

昨年 9 月に「医療的ケア児及びその家族を支援する法律」が施行されたのもその一つです。この法律で「医療的ケア児」は、医療的ケア(人工呼吸器による呼吸器管理、^{かくだん}喀痰吸引その他の医療行為であってその対象となるものが日常生活及び社会生活を営むために日常的に受ける必要があるものをいう。)を受ける児童等と定義しています。

医療的ケアとは、家族や看護師が日常的に行っているたんの吸引や鼻などから管を通して栄養剤を流し込むなどの医療行為のことで、医療的な生活援助行為を、医師による治療行為と区別するために、介護や教育などの現場で定着してきた経緯があります。

令和 4 年 2 月 17 日の川崎市障害者施策審議会において、「子ども発達・相談センターの現状と今後の展開」というテーマで、地域療育センターで顕在化している課題の報告に「中重度障害児への支援が十分に行き届かない」とあり、「中重度」という新しい尺度が出ていますが、日常的に継続的で濃厚な介護が必要な状態は「中」程度ではないと思います。子どもの発達支援に関わることですので、きっちりとした定義が必要だと思います。

ことばには、それぞれ生まれた意味があると思います。それを学び、社会状況がことばの定義に沿うように働きかけていく必要があると思います。

(川崎市肢体不自由児者父母の会連合会
石橋 吉章)

あやめ会家族ニーズ調査報告書が完成

推進センター通信第 27 号にて調査のご案内をしましたが、あやめ会では会員と精神疾患を患う当事者の実態とニーズについて 26 年ぶりに調査を行いました。その結果を報告書としてまとめましたので、概略をご報告します。

また、今回の調査及び報告書作成にあたり、協力研究者として、川崎市総合リハビリテーション推進センター^{たけしまたし}竹島正所長、河野稔明^{こうのとしあき}係長、清水寛之^{しみずひろゆき}係長、東京大学大学院山田理絵^{やまだりえ}特任研究員、立命館大学大学院後藤基行^{ごとうもとゆき}講師の皆様には多大なご尽力とご指導をいただきました。

1. 調査方法

今回の調査のために作成した調査票と WHOQOL 26（WHOが開発した世界共通の質問書で生活の質を問うもの）の 2 種類に回答していただきました。

また、調査票を補完するために、グループインタビューにより市内 2 カ所で会員有志の参加による聞き取りをおこないました。

2. 調査票の配布数、回答数

調査票は各区の家族会会員とあやめ会が運営する 4 つの事業所を利用する有志家族計 263 人と当事者 274 人に配布しました。調査票への回答は会員から 162 件（回答率 61.6%）当事者から 176 件（回答率 64.2%）で、WHOQOL への回答は会員から 156 件（59.3%）当事者から 116 件（43.4%）でした。

3. 調査票の回答結果の概要

① 会員、当事者の属性

会員について、年齢は 70 歳代が多く、性別は女性かつ母親が多く、持ち家があり、居住年数が長い方が多い状況です。当事者、家族とも高齢化した親子家族が散見され、高齢の親が中高年の子の世話をしている実態が垣間見えました。

当事者について、年齢は 40 歳代が最も多

く、次いで 50 歳代。会員との間柄は「子ども」が約 85%でした。住んでいる場所は「親の家」が多く、約 75%が家族と同居しており「グループホーム」など社会資源の利用は 4%と少ないです。

② 会員が抱えるニーズ

会員の求めるものは「信頼のおける医師」「経験豊富な医師以外の専門家」「病院」「寄り添う家族」と「精神疾患に関する適正な情報」を挙げています。また、当事者の 10 年後については、ほとんどの回答者（約 85%）が不安を抱いていると回答しました。その不安の大きな要因は「親亡き後」のことでした。そのための準備として必要な「お金」「住居」「相談できる人をつくる」を挙げています。それらのものがあっても生活能力の面で声掛けや援助が必要とするケースが多く、かかりつけの精神科医師や精神保健福祉士など専門職のほか、日常生活での支援者の存在も必要とされています。

③ 自由記入の欄より

調査票の「支援へのニーズ、家族会へ望むこと」の自由記述欄に記載された中からいくつかを紹介します。

・支援方法は沢山あり有り難いのですが、家族が受けるものではなく当事者の意思がはっきりしなく、不明なことが多々あり支援にたどり着くのに苦労します。精神の病の難しいところを、痛感しています。

・26 年前の調査も参加しましたが、こんなに長引くとはおもってもいなく、こんな

・精神面ではかかりつけ医に診てもらえるがその他内科、外科などでも安心してもらえる病院を作ってほしい。

4. グループインタビュー調査

あやめ会の各区家族会の会員 15 名の参加を得て計 2 回開催しました。

家族会への参加のきっかけや当事者との

生活に関するエピソードや考えを聞き取りました。その場では、当事者と関わる日々の暮らし、医療・支援機関との関わりの中で葛藤やもどかしさ、苦悩などが語られました。また、各区家族会の例会、あやめ会主催の学習会、講演会など学びの場への参加を通じて、会員同士の交流、専門家への相談を経験して精神的な負担が軽減したり、自身や家族の変化のきっかけを掴んだりしたことが示されました。

5. まとめ

今日のあやめ会の活動や事業の多くは第1回の調査を受けて提起されたものです。第2回の調査結果をもとに数多くの提言をいたしました。今後、当会や家族会が、会員数の減少やいわゆる8050問題にどのように対処し、活動を展開するかが問われています。

家族会は、社会資源の一翼として、地域とともに福祉の向上に向けた活動を推進して行きます。

令和2年の途中からはコロナ禍のため調査活動がむずかしい状況でしたが、60%以上の回収率を得ることができました。調査票への回答やグループインタビューへの参加をしてくださった会員の皆様へ感謝しております。お忙しい時間をありがとうございました。

今回の調査報告書は、概要版とともに当会ホームページ (<https://ayamekai.org/>) で公開しております。是非、ご覧ください。

(特定非営利活動法人 川崎市精神保健福祉
家族会連合会あやめ会 後藤 美穂)

川崎市内の事業所紹介「生活介護事業所 なしの実」

「なしの実」は、小田急線生田駅から徒歩10分のところにある、生活介護事業所です。近くに明治大学・専修大学があり、駅からなしの実までの線路沿いの通りは日中、学生たちで賑わいをみせています。近隣散歩では、馬術部の練習風景を見学させてもらうのが日課となっていました。現在はコロナ禍で外から眺めるだけですが、間近で見る芦毛や栗毛の馬たちが心を癒してくれます。また、「花いっぱい運動」で大切に育てたお花を配ってくれる近隣小学校・中学校の生徒さんたちが、毎年お花と一緒に笑顔と元気を届けてくれます。昨年いただいたお花は、今も玄関前で寒さに負けず元気に咲き続けています。

現在なしの実には36名の利用者が在籍しており、ほとんどの方が送迎車を利用して通所されるため、「なしの実」のステッカーを貼った送迎車両が5台、多摩区と麻生区を中心に走行しています。その他数名の方が小田急線や自宅からの徒歩で、なしの実まで通って



(なしの実外観)

います。

なしの実は平成14年に「なしの実地域福祉活動ホーム」として開設した、2階建ての建物です。若干、いたるところに老朽化がうかがえる箇所がありますが、施設再編の予定も未定のため、法人内では次々と新しい設備へと建て替えが行われていく中、まだまだ順番が来るまでの間修繕につぐ修繕で鞭を打って頑張っています。

建物は仕方のないことですが、こと利用者支援に関しては、常に主役が利用者、支援員はサポーターの意識で接することを心がけ、上質なサービスを提供させていただいていま

す。今やりたいこと、これからやりたいことを実現するために、今後も傾聴姿勢を大切にサポートしていければと思います。

活動内容は、レクリエーション等の余暇活動や、運動プログラム等があります。昨年 12 月にはクリスマス会と称して、東京都にあるクリスマス亭で、貸し切り食事会を行いました。ゲストにはサンタさんが 2 名。それぞれが日中活動の中で作成した、スノードームをプレゼントされました。こういった楽しい行事のほか、下請け仕事や自主製品づくりにも力を入れています。



(紙すきハガキ)

自主製品は紙すきによるはがき作りをメインに行っていて、「全利用者が作成工程の中で

どこかに必ず参加できること」を魅力の一つとして行ってきました。現在はバザーなどでの対面販売が難しいのですが、施設まで購入しに来て下さる方や、製品展示の際に問い合わせをして下さる方等、古き良き伝統製品を理解し購入していただいています。対面販売が再開されましたら、ぜひ商品を手に取り、はがきの質にも注目していただけたらと思います。

現在も新型コロナウイルス感染拡大に戸惑いながらの生活を送っていますが、しばらく感染予防は緩めることなく、利用者の皆様が安心に通える環境づくりと、こんな不安な時でも毎日通いたい、楽しいことをなしの実でしたいと思っていただける施設運営を心がけていきたいと思っています。

社会福祉法人 ともかわさき

生活介護事業所 なしの実

〒214-0034 多摩区三田 2 - 3256

TEL・FAX 044-930-5170・044-930-5171

(管理者 しみず りょう 清水 亮)

川 難 聴 「 日 帰 り バ ス 旅 行 」

川難聴 10 月例会「日帰りバス旅行」は、10 月 17 日(日)に「はにわ博物館いのうただたか&伊能忠敬記念館と山車会館の佐原巡り」のコースで実施しました。コロナ対策のため参加者は 25 名と要約筆記者が 2 名。当初の計画では、「はにわ博物館」を見学後に「かんぽの宿 旭」で昼食をとり、銚子の「ヤマサ醤油工場」を見学する予定でしたが、コロナ禍のため工場見学は出来ないことが分かり、予定していたコースを変更し、昼食後は銚子へ向かわずに佐原方面へ向かい、「伊能忠敬記念館」「伊能忠敬旧宅」「樋橋といばし」「山車会館」など佐原めぐりの行程で行ってきました。当日は、朝 8 時 40 分に武蔵小杉北口ガード下から市福祉バスにて出発し



(はにわ博物館)

ました。

最初の目的地の「はにわ博物館」は、首都高速湾岸線を経由し、千葉北東金有料道路の松尾横芝 IC で降りて、はにわ街道をしばらく進むと芝山の「はにわ博物館」駐車場に到着しました。芝山町の古墳と埴輪は、千葉県



（日本一の大人形山

内でも有数の密集地であり、古墳時代後期の 6 世紀頃「武射のクニ」（古墳時代の呼び名）と呼ばれた中心地で、殿塚や姫塚などで精巧な造形美に優れた埴輪が次々と出土し、館内には「房総の古墳と埴輪」をテーマにした当地域の埴輪を一堂に集めて紹介してありました。古墳時代の住居も実物大で展示され内部を見学できるようになっており、当時の人々の生活ぶりを知ることができました。

「はにわ博物館」見学後は、九十九里浜の「かんぼの宿 旭」で昼食をとりました。お天気が良ければ太平洋の眺めが絶景なのですが、生憎の雨模様で景色が眺められず、昼食後すぐにバスに乗り込んで佐原の「伊能忠敬記念館」へ向かいました。佐原まで約 1 時間掛かるので、車内では「ビンゴゲーム」を皆で楽しみました。佐原は潮来に近いため「あやめ祭り」の時期は大変な賑わいの場所ですが、当日は混雑もなく、佐原めぐりをゆっくり観光できました。伊能忠敬は、1745 年に現在の九十九里町で生まれ、50 歳を過ぎてから日本全国を測量して歩き、日本最初の実測日本地図を作り上げた人物です。記念館では伊能忠敬の 50 歳までの前半生も年代別に展示され、測量に使った実際の機材や、全国測量の行程表も見られました。全国測量の業績の結晶が「伊能図」として国宝指定されてありました。

その後、「伊能忠敬記念館」の向かい側にある「伊能忠敬旧宅」と「樋橋」を見学しました。「伊能忠敬旧宅」は、伊能忠敬が 17 歳で

伊能家の婿養子に入って住んだ家で、現在までそのまま残されており、国の史跡に指定されています。「伊能忠敬記念館」と「伊能忠敬旧宅」の間の小野川にかかっている木造の橋が「樋橋」です。それも国の史跡指定です。ある一定時間になると橋の中央辺りから水が流れ出ることから「樋橋」と名付けられましたが、地元の人は「じゃあじゃあ橋」と呼んでいるそうです。しかし、わたし達は水が流れる様子は見られませんでした。

最後の見学は「山車会館」でした。「山車会館」までは徒歩で移動。街道の両側に並ぶ昔の町家・土蔵・レンガ造りなどの情緒漂う建造物の街並みが佐原街めぐりに相応しい光景として印象的でした。関東では初めて国の「重要伝統的建造物群保存地区」に指定されています。「山車会館」は大きな建造物で、館内には、佐原の大祭りを彩る「日本一の大人形山車」の実物が展示されており、全体の高さが 9 メートルもあり豪華な造りでした。

今回のバス旅行は、天候がわるくても建物の中で全て見学ができたので、皆が楽しめました。

帰りは予定通り 18 時 30 分に武蔵小杉北口に到着しました。来年度もまた秋頃に日帰りバス旅行を計画しております。

(NPO 法人川崎市中途失聴・難聴者協会

伊藤 實)

編 集 後 記	
多くの記事に「コロナ」という言葉が使われ、活動が制限されている様子が伺えますが、繋がりは大切にしたいですね。	
(編集委員 室住 二三夫)	
発行人	神奈川県障害者定期刊行物協会
〒222-0035 横浜市港北区鳥山町 1752 番地	
障害者スポーツ文化センター 横浜ラポール 3F	
横浜市車椅子の会内 (頒価 100 円)	